





泰西七金譯說卷之二目錄

銀

種類

產處

製取銀法

性質

功能

銅



總論

鎔化銅及真鍮使之軟柔法

柔軟真鍮法

精潔諸銅器且令存原色法

令銅或真鍮美黃色

真鍮亮黃金色法共二法

令真鍮為黃金色法

令真鍮白色法



製白銅法

錢

種類

製法

製銅錢法

性質

功能

泰西七金譯說卷之二

洪江札 監試 馬場貞由 譯述

支爾弗尔此譯を銀

銀ハ羅旬語呼て亜尔儉的模と云ひ製煉家此を
留那と云ふ七金の中よ於て其貴きと金よ亜く
質白色よして光澤有り能く鳴響となし又能く
打ち延ハを可し

種類

銀も二種あり土中より掘り出したる儘の純銀
と自然銀（自然銀）と云ひ金石と混和し製法（製法）以て取り
得る（得る）或荒銀（荒銀）と云ふ蓋し純銀ハ每小岩石の間或
ハ土砂と混交して種々の形をなす或樹木の枝
の如く或ハ樹葉の如く或ハ毛髪（毛髪）の如く或ハ絲
索の如く或ハ粒状（粒状）あり又時としては大塊
なるあり即ち阿刺烏斯（阿刺烏斯）密烏斯（密烏斯）の著書小

曰諾（ノル）勿（カ）瓦（カ）亜（カ）の山中より重き八貫二百目の大
銀塊（銀塊）掘り出せしとありと

荒銀の鑛石中に在ると記ハ其色一ならず或は
赤色よりして礬石（礬石）帯ひたるあり或ハ自然ニ混交した
て硫氣を帯ひたるあり或ハ又自然ニ混交した
る金石の色より因て黒色なるあり紫色なるあり
灰色なるあり凡そ銀ハ金鑛銅鑛錫鑛鉛鑛等より
多きはありとも皆混交してあるあり

産處

銀山ハ諸国ニ多ク意大利西獨逸都蘭杜翁尾里
亞諾ル勿尾亞及ヒ諸厄利亞等の内ニ在リ此外
最も夥しく産する所ハ西聖利加洲の墨斯哥及
ヒ孝露の波杜細ニ在リ山あり

諸厄利亞の諸鉛山ニハ皆銀少クハ阿色とも
此を採らす唯其国中カルチカカ地なる山中
の産の少ク取る此處ニハ銀最も夥しく土石千觔

と穿てハ毎ニ銀十六七觔得るなり

製取銀法

鉛灰以て銀を製し取る可し其法ハ灰を疑して
皿の形ニ造り成し此ニ鉛灰盛て竈中の火上に
置くと此ハ鉛鎔多て硝子の如く化し乃鉛ハ皆
右ニ云ふ灰造の皿の下ニ潜り漏れ獨り銀のミ
皿の中ニ養色成頭して留在るなり
孝露及ヒ墨斯哥なる山中の銀ハ容易ニ採る可

らすあま唯深く堅硬の石内は翳きたるに因る
此とるるを尚其土中は自然の油気硫気辛蝕気
丹礬及礬石等の気多くあまハ銀自のら消散し
或ハ此等の気は因て滓となるあり

此は因て鑛石の品類は隨て其製法を異となす
鑛硬くして槌を以て打砕く可らば物ハ先つ
此は微火は煨き以て揉み砕く可きり為免と
又一は混交したる異質の物を其煨る色は

視て知る得るなり

異質の物多く混交したるハ先つ皆石にて末は
搗き砕くなり而してあまは若くアンチモニヤ
或ハ硫気混交したると知らハ鉄錆或ハ鉄砂を
加へて煨化をるなり又あまは錢氣は帶いたる
と知らハアンチモニヤ又ハ硫黄を加へて共は
煨化をるなり煨化して後ハ此は夥しく水銀と
加ふ水銀は加ふまハ色変り形長く其は視たり

の如くは好く有り但し其色変じて赤黒色とれ
ると此の鉛或ハ錫成含きたるは頭微と云銀鑛
成精製すれは一合茶あり名て「マギステリヤ」と
云ふ此を煨化したる銅成大ふして製したる物
有り若し銀鑛は水銀の混和して何ると此の
成以て此成揉み搾き水中に投し洗ひ灌く可し
又塵埃等の交りたるハ水飛を可し塵埃ハ上
浮み銀及水銀ハ其底に沈むる此沈きたる成

取て綿布に入ま絞ると此の銀と水銀と分ま銀
ハ綿布中に残り水銀ハ外に漏れ出るなり其残
りたる銀ハ土器に入ま火に上せて其餘分の水
銀を蒸散せし免且あるは其五分之一程の銅と
加へ共み溶化し終ふ一塊となしむ可し
銀と銅の交和したる成分離する法何り名て「カ
ペルハンロー」と云ふ其法ハ白色となる迄煨
化したる骨粉或ハ鹽気の去るまで洗ひ灌きた

る灰を取て水城加へ能く溶て小罫と造り乾く
此は成竈内の火中へ居へ置きて此中へ其分離
せんと欲する銀の五倍ほど鉛を入き鎔し而後
其分離純精よせんと欲する銀城入き共よ鎔
化するなり既ふ化したるハ益火勢を強く以強
くすると此ハ鉛ハ益の孔眼へ侵透し獨り銀の
光澤成るし且既よ純精よ作りて罫の中へ留
在するなり但し其加入したる鉛ハ自のら蒸散

する故ふ分量甚減少するなり
金と銀と混和したるハ分離法別ふ在り蓋し金
銀相和し銀より金の多き時ハあきふ其金の四
倍程も新よ銀城添へ加へ一固よ鎔化せしむ而
して既よ化したるハ此は強水中に投るなり乃
ち獨り銀城を解化して金ハ自のら黒色の粘液
の如く作りて底へ沈むなり沈むたるハ罫を傾
め上清を除き按よ此の上清あり 数度此と水飛

而後ニ鎔化をなすなり又其解化し上清となり
たゞ銀ハ其十二三倍不との水を加へ且大れ
ハ銀ハ自ら白粉の如くなりて悉く其銅片
附着を此附着したる液取て乾し且鎔し鑄て提
竿となすなり

性質

銀の質ハ金より硬く重さ金及鉛より軽し又金

の如くは銀ハ延ハを可らす都て銀の混和した
る金鉛を鎔化するときハ銀ハ必を其上に浮む
なり金と銀と重さの差ハ五と九の如し即金
ハ重きと大ニ銀ハ勝るなり
銀ハ錆るとなれとも硫氣の中ると此ハ黒色
となる強水に浸せハ解化を速とも王水に漬て
ハ解和せを又アンチモニヤノ硫氣に觸せハ化
滅を速とも鉛液以てハ化滅を速とす時久し

く猛火中ニ投し置くと此ハ自うら減少消滅を
又此を顕微鏡と以て取る太陽の火氣ニ當ると
きハ悉く化して煙となり消散するなり銀ハ鎔
化せしめても他の諸金の如く粘柔なるに少く
ある一種の硫氣自註にて曰此硫黄ハ一種の好く光
澤成る且よく度微少きが故あり銀を火ニ煨
するふ其消散するとの多き色亦全く去るに因
てなり都て純銀を解化せしめたるハ色最も鮮

明なり按強水等を以て解又去る硫黄製法して
束針様なりたるハ皆無色あり按ハ潔白透散
なりを然るに少くても銅氣の加はりたる
ハ其色緑或ハ青を帯ふるなり自註製日其束針
の味最銀ニ食鹽を加へ鎔化したるハ少く
透徹して透したる角成見る小等し故に此を「
ナ。コルニ」即角銀と名く此を再び原の銀と
なすとハ甚し難し何んとなれハ此を武火ニ上

をよと記ハ皆莖散して悉く風化をまハなり

功能

垂刺皮垂人ハ銀を以て腦及頭城強盛小一精心
を補ふ功ありと云ふて種々の茶劑と調合を然
まとも予ハ敢て此説を信用せは恐らくハ銀は
其功ハ何らさ可一

銀箔の製法及び木石小貼銀の法ハ皆金を以て
すると相同一故に爰小略を金の部小於てあれ

成見可一

革^カ悪^ク柿^シ尔^ル此^レ譯^スを^ル鋼^カ總論

往古より製煉家にて鋼小淫女神の名を取て勿
内斯と名く蓋し鋼ハ諸金と容易に混和し好く
接合すらう故あり鋼ハ能く酸鹽酢灰汁油及ひ
此外淡薄の水液にて解化を槌を以て打ち延ハ
を可成れとも金銀の如くよハ延ふ可らず猛火
に焼くさきも溶化せし其溶化せんとすれとき
ハ必緑青色の火と発し既ニ化してハ色終き海

綠色となす冷定してハ赤色又金色ハ黑色或帯
ひたる色ハ変を挺竿ハ铸造を可シ其精製して
るハ色最も美紅にして「フロレンティンスラック」
按ハ燕脂の類と以て深めたる物の如シ就中日本産の
銅ハ色最も良シ

諸金とは最も良く混和をせとも亦其混和した
るを或よく表し顯を故ハ此を混交せし免たる
と或匿すと能くす何人となすハ亦或混和せ

し免たる金ハ鹽酢等の気或着く或ハ自より緑
色或表し顯せはあり

銅ハ銀より軽く錢錫より重シ

諸坑皆錢と出をより銅を産するところ多シ其坑内
ハ在るるときハ狀色毎ハ一なるを土石中ハ混交
したるハ色或ハ緑と顯を何り或ハ青を顯をあ
り紅色透徹したる物ハ少シ凡毎ハ錢氣或帯ひ
たり其錢氣を帶ふる所の多シハ因て火ハ上せ

鎔化をよ遅速あり則錢氣愈少けきハ其鎔化
まると愈速なり又皆よく硫黄及礬石の氣を帶
ひたるなり精製したる鋼ハ能く錢よりハ打ち
延ハを可

差別種類法精製法及用法ハ悉く顯缺耳西勒里
格刺斯勿田皮休爾枯以上名の著書小詳あり又其
略法ハ加刺墨尔人の著書名ハ出せり爰ハ略を
鋼ハ皆創り鑄て塊となし而後ハ此と打ち延ハ

して罌罐等を製造するなり我邦ハてハ蘇亦齊
の鋼版を用て益其法造る国中の諸坑皆精製の
鋼を以て其抽梳を収免しむるなり

瓦尔埴尔蘭杜地ハ水車を以て鋼と延ハを其
此法打て延ハを槌ハ水勢を以て動揺せしむる
なり

鋼ハシンキキ按ハ鋼ハ垂鉛を詳ハ附譯中ハ譯述を
を交和をせハ真鍮トなる真鍮トなるたるハ鋼

の如くハ延ふ可らざるなり其亜鉛と云ふハ
一種の半金（ビツケル）按く物と云ふハ火中ニ投をまハ
悉く消散し且皆鍍気成帯ひたるあり故ニ真鍮
ハ悉く鍍気あり鍍気ある故ニ近世羅針の
室ハ真鍮を用ひも大ニ羅針の偏東差を生せ
しむまハなり乃今時ハあまふ木成用むて造り
且其周囲の度分を調劑を可き處ニは象牙の板
附を此を「ロンドン」なる「スマート」と云ふ人窮

理して始て発明せる所なり

銅ニ亜鉛を交和をまハ「プリンス・ハン・ロベルツ」
メタール一名「トムバク」（按）のハタニカ金と云ふ
中ニ譯となす又此ハ「ラベルメン」ト（按）黄色なる石物
なり但此ハ自然生と製造の二種あり製造納
物ハ礬石九分硫黄一分を交和して莖露罐ニ造
免て升煖したと錫と加へ溶化をまハ鏡と造
る可し又銅ニ錫を加へるハ「ブロンズ」（按）カ
の類なり名て諸の音響器及像と鑄造をるニ用

て最も良し

金銀は堅硬なるが少く鋼を加へて鎔和
と可し都て堅くなるなり

儀器家具大砲版索活字等ハ凡そ皆鋼は用て造
るあり鋼を堅硬と為さんと欲せハ槌と以て打
つ可し鋼鍍の如く堅硬なりあり

鋼真鍮共は多く厨房の器具は用ゆ別て拂郎察
国中皆鋼製の器を用ゆると多く但し鋼は自

然の毒氣あり故に緑色となるを避け防ぐたが

為欠し鋼製の器は皆渡錫を施すなり自註は日

洗るハ脱多易し故に絶へを乃食物等を久しく鋼

器に入を置くに勿れ別て鋼器に入を冷へたる

物に食をると勿れ必害となすなり

酒油酢等の滓を以て鋼に塗ると此ハあまを透

蝕して鋼自より緑青とあるなり詳らうは緑青

の條下小載を

鎔化銅及真鍮使之軟柔法

硝石葡萄酒石食鹽各等分を採て搗き細末とな
し文和し置く可し而後ニ銅或ハ真鍮を鑪壺ニ
入る火に上せ鎔化し其よく壺底ニ沉ミたる候
見ハ右の合未成少しく其中ニ入る可し而其未
鎔化したるハ又少しく加ふ可し此まゝ化した
らハ再又少しく入る可し銅二十五觔を
ハコルル候ハ上の果實程の合未を徐々ニ加へ鎔化

も可し銅甚と軟柔なる候

柔軟真鍮法

先づ葡萄酒石硝石及び硫黄を採て共ニ搗き末
となして交和し置く可し而後ニ粗硬の真鍮と
火小焼きあきし右の合未成塗り着き室ニ納る
冷定せしむ可し其柔軟なる候刀成以て削る
可し

精潔諸銅器且令存原色法

酢と水と等分と合せたる色の三貫二百錢明礬
百九十二錢蜜九十六錢煨化したる葡萄酒石四
十八錢を取て共と煮る可し而して其中と不潔
汚穢の銅器を入きよく煮且つ綿布を以ておれ
以其湯の中と於て磨を可し汚穢不潔の物悉く
去るなり去りたる此を火邊と於て乾らす可
し乾らざる其上と又磨く可し甚と黄色しれ
ば其色容易と変るるをなす

令銅或真鍮美黄色法

硫黄明礬泊夫覽硝石及び煨化したる葡萄酒石
と採て共と水と投し此と銅を漬る九一小時の
間煮る可し而後小火より下し其儘其中と浸し
置くと一宿則ち銅甚と美黄色と成るなり

真鍮発黄金色法

砂石の混交せざる白^ハ石脂三十六錢硫黄四錢共
と精密の石盤上と於て磨り極末と成し此と以

て預め精潔よなく置きたる真鍮を磨く可く美
麗の黄金色とあるなり

又方

唾よて鹵砂の末を研き此を真鍮に塗り猛火上
小炙る可く金色とあるなり

令真鍮為黄金色法

真鍮九十六錢に亜鉛八錢を加へて鎔化を可く
鎔化したるハ器に蠟を塗り置き此中に移せば

く自より金色とあるなり

令真鍮白色法

諸厄利亜産の錫乃鑪子屑と葡萄酒石の末とを
等分よ採り共よ陶器に納き其上よ水を加へ此
中よ精潔よあつたる真鍮をよまて煮る可く其
真鍮自より白色よ變して恰も渡銀したる物の
如く

製白銅法

屋根瓦杯に用ひ年久く外に曝したる古き銅又
ハ古に銅の鍋釜等の類六拾四錢鑪壺に入き鞆
と以て鑄りすと四半小時上は浮む粕を去り石
灰又ハ灰又ハ蘇蓬鹽又ハ硝石等の灰汁の中ハ
篩と以て漉し入る可し然ると此ハ其銅細粒と
あるなり此取れ又鑄化し右の如く漉し清く
するを四五度而して其よく清潔なるを窺ひ
又鑄化し礬石ハ錢初め徐に入き次第に早急入

き盡し白註絹布と乳汁其煙浸し鍋これを以て甚恐る故良
べく塞ぐ並銀八錢を入き又篩を以て漉すと此
ハ則ち白銅となる是故以て諸の細工及ひ諸器
と造るの用と作る

又方

礬石六十四錢硝石葡萄酒石各三十二錢礪砂ガ
ラスガ泡按硝子と鑄化法詳説中其上浮む
り各十六錢末に搗き能く交和し鑪壺に入き鑄

化をると凡半時而後より取り出さへ黄色を帯
ひたる白色の物或得るなり按て是を末に
な小便六百四十錢食鹽一握白葡萄酒石十六錢
明礬八錢と煮たる灰汁の中より打延べたる古き
銅一分打延へく古き真鍮一分各細く刻きよ
く煨して入る可し此を煨して右の如く灰汁よ
漬ると十一二度を可し尤も時々暫く其灰汁
の中より漬置く可し右の如くして銅真鍮共に能

く清くなりたる鑪壺より入き武火より上せ鞴を
以て鎔化し前より記せる黄色を帯ひたる白色の
物を末となして徐々より入き盡を可し箸を以て
よく攪勻し自註曰銅四分錢なり右の末其調
和をる或窺む硝子版の破きとるを二三片入き
鎔化而して鑪壺を取出しワルノト按て是は
きハ白色となりて重さ九十六錢なりと得る是

よ又銀を少く加へ礮砂放入き鎔を時ハ白銀よ
紛ふ可き白銅と好るなり若く細工よ用ひ鎔を
時ハ礮砂を少くつゝ加ゆきハ脆く又物を
捲ゆると兒ハ度々温り徐々よ打延へし急よ強
く打延ふるときハ破き易く数度温り徐よ打延
ふり時ハ其品甚佳なりとい
器となしたる後ハ其器を煖く炭を以て上成磨
き葡萄酒石放入たる水よて三度煮る可し是を

成常法とす

此の法は昔の法に似てはるるが如し其の
所成の品は白銅と云ふなり其の法は
礮砂を少く加ゆきハ脆く又物を捲ゆると
兒ハ度々温り徐々よ打延へし急よ強く打
延ふるときハ破き易く数度温り徐よ打延
ふり時ハ其品甚佳なりとい

也イ池爾ニ是ニ譯スを鉄ヲ

錢ハ羅甸語呼て勿爾略摸ニ云ハ製煉家呼て麻

爾期ト云ハ諸金ノ下ニ位セ其ハ質堅硬トして

且能ク鳴響ヲなす故ニ其用最多ト琢磨スと

るハ白色ニ少シ赤黑色ヲ帯ヒたり琢磨セき

荒鍍ハ皆黑色あり

種類

鍍ノ精粗ノ二品あり精なる物ハ羅甸語呼て亞

細意斯と云ひ又加羅部斯とも云ふ拂郎察語呼
て亜細意爾と云ひ獨逸都語此を斯答亞爾鋼按鉄
を云ふなり

鉄ハ諸金の内ニ於テ最も人間の要用有益の物
なり而して諸国凡そ皆鉄を産せざる国ハ少
獨逸都国ニ鑛山あり生鉄鋼鉄を産を然まとも
拂郎察国の産其品大ニ勝まりとす
鉄ハ皆土中より掘り出を其鑛石の形状ニ種々

あり或ハ精鉄粒をなすあり或ハ紫色或ハ黄色
或ハ赤色の重き石内ニあるあり或ハ黄色或ハ
赤色の重き砂中ニ在るあり又其鑛石の質ニ因
テ容易ニ鉄を分離を可きあり或ハ分離ニ易
らざるあり又小く碎きて炭末を加へ火ニ上を
るニ暫時ニ鎔化をるあり或ハ甚ニ鎔化ニ易
らざるあり總て鉄鑛ハ石灰の類ニ加ふ
速ニ鎔化をるなり

製法

鑛鉄と鎔化したるハ先づ大なる円く長き物小
鑄成を可し而後又此を再鎔して打ち延ハを
かり其あまひ再鎔したるときハ絶へを甚しく
攪勻を可し能く攪勻したるハ鑄流して其尚炎
熱なる間ハ槌を以て打つて則ち能く延び且
つこれハ混和したる異質の物皆大に時々飛散
は去るなり

既よ斯の如く為すなり然るハ韃を以て炭火の
勢を強くして此を焼く可し能く焼けたるを
砧上ハ載せ槌を以て打ち延ハ其欲を以て
の形状より作り成を可し然る中ハ鑛鉄
鑛の性ハ粘なりと粘なきものと二種あり粘
あると上品と粘なきは下品とを其性と
異ふを以て所以ハ自らの其中ハ含有する土氣丹
礬の孔及硫気等の多少ハ因るなり

製鋼鉄法

鋼鉄となすものは数度生鉄を鎔化し且其滓を除き去るなり但し速く鋼鉄と成る所り又容易に成らざるあり鋼鉄を造るの法ハ種々ありとも就中其良法となすもの即鉄を取て竈中へ納免鎔化し既よ化したるハ此より葡萄酒石鹼蓬鹽鉛屑及び牛角粉等分よ合せたる或徐徐よ加へ絶へ攪勻して而後ハ鑄流し砧上に載せ槌を

以て打ち延ハし適宜の槌竿となす可し又又鉄を鎔化せむ小鋼鉄と成る法あり其法ハ大さ指の如き数筒の鉄條を取り陶器よ入せ其上よ煤及炭の末と牛角粉と又ハ牛毛と或交和したる物を入せ又其上小鉄條を納免斯の如く相互に納り蓋よ充ちて蓋を覆ふハ氣の漏れさず様よ蓋の周りを塗り塞き此は竈中よ納免漸く小火勢で盡し其陶器の火となし造焼く可し而

後其火の自ら消ゆる迄ハ其儘ニ竈中ニ置く
可シ火既ニ絶ヘタルハ此を取り出して蓋を開
き鏡條を取り出を可シ銅鏡ニ成りたるなり按
我邦ニテ「ガ」或ハ瓢「覃」鏡蓋シ其銅鏡と有りた
る乎又求ニ成ラズ孰乎を知るニハ此成折リ試
むヘシ能ク折キ且其肌密実ニ見ゆると凡ハ製
よく成就したりと知る可シ又其肌実セす處々
ニ氣眼見ゆるとき凡製未ニ調ニさると知キ又

外面のニ実シて内ハ密実セざる物アリ此等ハ
皆蒸煨の不足と云々之のと知る可シ斯の如キハ
彼と前法の如ク陶器ニ納免て再煨を可シ之
凡性質凡諸金の中ニ於て最も堅硬なり又銅鏡成火
ニ焼死冷水ニ投シて一端ニ冷定トたる物ハ尚
堅実なり金ニ鏡との重さ乃差ハ凡七ト三ト
の如シ熱鏡を水ニ投入シ其水成味ふときハ猶

錢鏞を味よの如し錢を水に浸し浸しては乾く
乾くしては浸しすると死ハ其錢速く化して黄色
の石灰の如くは変を又絶へを錢を水に浸し置
くと死ハ鏞及て速く出てさるなり錢の鏞を生
をろ紙防々んは脂油を塗る可し此外ハ術
なり錢屑を多く積み重杯をまき濕氣が加ふる
と死ハ自のら熱を催を又こきふ硫黄を加ふれ
小自のら熱が發するなり時久しく錢を竈中

焼くと死ハ錢自のら赤黒色或ハ紫色の灰に化
するなり又錢を烈火に焼き其鎔化せんとすれ
頃小此を取り出し槌を以て打つと死ハ片と成
て飛散を其飛散したる屑片ハ皆凡硝子に近死
物なり按は透徹をる竈中小鏞を焼くと死ハ炭
灰と鏞中の土氣と相和をると死ハ一種の硝子
様なる泡の塊凝したるの如き物を生を此が名
て鏞滓と云

アレンダは一種の自然鹽の類にして舌上の能く錢として解化せしむるなり。蘇蓬鹽ハ然らず。鍍屑を取て火中ニ投をまハ火光燄を鍍屑と硝石と等分ニ合せ焼けたる鑪壺ニ此を入るときハ忽ち沸騰して嗅煙を生し終ハ電光を放つ又鍍屑と丹礬の精氣ニ投をるも甚しく沸騰して夥しく煙を生を此ニ炳火燄近づくまハ其火忽ち移て大なる響をなす其火燄納めたる

器を破製せしに至るなり。瓦磚の上ニ錢を載せ大なる顯微鏡を以て太陽の火燄取り此ニ其錢を當ると忽ち鎔化し夥しく煙を生し終ニ黑色ニ變じ揉み碎く可きものとなる。燂炭の上ニ錢を載せ顯微鏡燂炭以て取りたる太陽の火燄當ると忽ち炎を放ち自ら消散せりなり。但し右の瓦磚上ニ載せ太陽の火ニ當て變質せし免れず。再ハ燂炭ニ移し

載せ日火は當ると見ハ暫く鏡の本質は復し而
後小又煙炎を放て自より消散するなり
此を以て考ふるに鏡ハ脂油丹礬鹽土等の氣自
然と交和し成りたるものなり若し然らざる物
あらハ硝氣を以て侵蝕し且冬放つ可き理な
し或曰鏡は丹礬鹽最も多し其故ハ鏡は水に
浸せハ必も解化し且其水は丹礬の味ありと
又曰鏡屑は濕氣を加ふまハ熱氣を催を金石中

なる自然鹽皆斯の如き性ありと
炭中の硫氣と鏡中の硫氣とハ固し其水性は
異し自然に鏡中より又自然に炭中の硫氣を
兼採含みたり故小鏡は太陽の火氣は當まハ冬
を發して自より消散するなり
鏡ハ脂油丹礬鹽及び上気等自然に相和し成る
物なりとハ必せり何んとなれハ白石脂は丹礬
の氣を帯ひたる土と火氣を催を可き自然物に按

何物と云とを交和するに即錢となすは未
可考とを交和するに即錢となすは未
り都て火気ある實體物此詳を煨して純精とな
ら志免人と欲してこそを焼くとに其残りた
る灰の中は錢ありあれ屢磁石を以て試み知る
所あり尤も煨せざる以前ハ少も其色は銀気あ
るとハ顯きざるなり

功能

錢ハ人間の日用小暫くも闕く可らず即器具と

なり且茶用となして其功最も多し故に貴重を
可きものなりギリシヤ国の古くハ此を内腹
科で奇功あるとは分明ならざりた培郁斯格
培斯名曰錢錯ハ收瀉の功あり子宮より発血を
るに用て最も良し又熱錢を漬きたる水或ハ六
味浸し葡萄酒ハ下血赤痢乳糜利霍亂脾
の諸病及ハ胃腑の衰弱なるに良しと
醫家よてハ此は開塞收瀉の二功ありと即諸

腸の衰弱いたる筋或強壯となす功あり故に月
水脾肝及び諸腹の閉塞或開き下痢下血を止む
るに用ゆるなり一説にハ脾病より生じて鬱気
を生ずる其毒液を除き又萎黄病に良くと又曰
錢は八種々の功ありといへとも就中開鬱開通
收瀉の功ありと

茶用はハ銅錢より生錢或良くとを諸醫家月水
及諸管の閉塞を開くには精潔よなるとたる錢粉

を以て炒茶とを但し此を丸し二分より五分の
間を一日は一度或ハ二度用ゆるなり

